

あを

9

2012



CAFÉ 傳



晩年は草臥れ上手葛の花 堀内一郎

あを

九 月



ゆく夏

佐藤喜孝

八月のあしたは油炒めかな

馬跳の背中が道に夏も饅え

蝙蝠のへらへらあぶらたらしつ

來かかりし打水のすゑながれゐる

福浦 三句

八月や自動販賣機の眞水

すてられて錆びぬ金属夏の草

一ぴきのくらげのやうな土用風

谷の章

河の章

名の章

家の章

里の章

これは私の句集『青寫眞』の目次の一部です。句は春夏秋冬・無季の五つに分けた。この変挺な遊び心の章名に筆を触れてくれた人が一人ゐた。熊谷よしゆき氏である。それぞれの漢字を「や・か・な・け・り」と読ませる。これを漢文読みにして「谷や河はわが家と名付やう」とこじつけて読んでひとり楽しんでゐた。あれから三昔ほど経ち第二句集『母瑠河』を知人に読んで頂きたく小部数作った。両方とも偶然に色の名前が入ってゐる。もし次の句集を作る機会があつたら何の色にしようか夢想してゐる。

信州小諸菱野温泉 赤座典子

梅雨明けて絵日記の景一面に

捕虫網ヘルメットの子の振担ぐ

楽し気に葉を揺らしをり合歡の花

露天風呂出て空色のかき氷

涼風と初の馬刺にもてなされ

ずくといふ方言教はる夏の宿

虚子庵に句会あるらし半夏生

信州へはよく旅行していたが、息子が小諸に実家のあるお嬢さんと結婚し、より一層身近なところとなった。

小諸にはまだまだ知らない所も多く、折にふれ立寄る機会を作る事となった。その際必ずで両親と会い、その度に打ち解け、地元の温泉や蕎麦処を案内して頂き、賑やかに時を過している。

今回は、露天風呂へ登山電車（ケールカー？）で行く。珍しい宿に泊ることが出来た。

歸りに、虚子記念館をも訪れ、念願を晴したことであった。

草
い
き
れ

大日向幸江

紅木槿南京街の裏通り

茜雲戻つて来る遊漁船

青年の足首細し葦青し

頭より被る川水草いきれ

残酷に西瓜を割って笑ひ合ふ

足裏に活断層や多水沸く

姉妹の忘れた遊び蚊帳吊草



夏

木村茂登子

手ごたえのありて怖ろし蠅叩

大川を檜舞台に大花火

絢爛のあとかたもなき大花火

大花火終りしあとにスカイツリー

目つむりて炎暑の中の風にあう

風鈴市風のリズムに絶え間なく

あと咲きの一輪を抱き花菖蒲

蠅叩でましんに蠅を叩ける確率は
あまり高くない。

うまく捕えたとしても叩き潰され
た骸の処理には気後れしてしまう。

或る時蠅をとるには蠅叩をもつて
空中で蠅を打ち、蠅が目を廻して落
ちたところを始末すれば畳なり板の
間なりを汚すこともない、と教わっ
た。私には思ってもいなかった蠅叩
の使い方であった。

その後はそうすることにしたが、
落下した蠅がまだ生きていると思う
と布なり紙なりで撮むことに一瞬躊
躇する。すると蠅はすぐに立ち直っ
て飛び去ってしまう。かえりみて今
までの私の生き様の中で蠅叩の扱い
方のように拙い方法を講じていたこ
とが多々あったのではないかとお
もってみたりしている。



齊藤裕子

草引けば虫の浮世が在りにけり

草引くは想定外と虫嗤ふ

単身の夫は得意に胡瓜もみ

胆嚢が在り処を叫ぶ半夏生

脈拍が水枕打つ半夏生

薬液の膨らみて落つ半夏生

五分粥を咀嚼してをり半夏生

一年以上、俳句から遠ざかっておりました。夫の名古屋単身赴任、赴任地での自分の入院、鹿児島之母の2回の目の手術、夫の病氣、引越、退職。いろいろなことが次々と起る、そつという年回りだったのです。やつと笑つて思い出話が出来るようになりました。

句帳を開いてみたら、日の目を見なかった数行の俳句が並んでいました。読み返すと、去年のことが思い出され、拙いながらもいとおしくなり、投句することにしました。

これを機に、また俳句と格闘してみようかと思ひます。

七 月 篠田純子

手火花はストロボ背は黒い川

蟻やヒックス粒子が見つかった

団扇風寝てばかりゐるおかあさん

羅の母と佃の渡し舟

打水が坂道を行く蛇になる

老鷺のゑひつつ酔はせぬたりけり

炎天下無機物になり済ましゐる

中断していた、板東三十三所観音巡礼を再開した。七月十六日に主人と、長谷観音に詣でた。暑い日だった。老鷺が自信満々の節まわしを聞かせ、蟬も鳴いていた。観音様は思ったより大きく、涼やかな気持になった。弁天堂の岩滴りも涼しく、屈んで迷路を楽しんだ。

食事をしてから海の日なので海を見に行くと、御霊神社の神事に出会えた。お祓いのあと、三十人程の人が（お供えを持つ人もいて）海に入り沖まで泳いで又戻ってきた。お雛子も賑やかに心が浮き立ってきた。中にはこれぞ日本男児という締込み姿もいて格好よく滴っていた。そして神輿が海に入っていく。

私達は又、江ノ電に乗り鎌倉へ戻った。



芝宮須磨子

夏服のタグに記せる異国の名

訃報あり過ぎこし夏のあれこれを

人訪ねほのかに匂ふ天花粉

釣り仕度いそいそとして鮎そこに

まつはりて何伝へんかシオトンボ

さるすべり庭一ぱいに葉の茂り

医者の方ことさら額の花の濃し



風 鈴 定梶じょう

夏岬燈台の白ちよんと乗り

なめくぢり石やが破産したさうな

一畝に茄子と蕃茄と母長生き

この怒り何かは知らね田水沸く

げじげじの句はえ作らじ嫌ひな虫

かはせみが翔ちて緊張くひぜは解く

よくひびく風鈴家の奢りとす

句作りに文語を遣いながら現代かな遣いで書く方が多いようだ。短歌の方では相当いるという。

阿部完一さんは新かなを遣ったが口語俳句だったし、頑張っというらしいやる坪内稔典さんも新かな遣いだが口語俳句。大岡信さんの『新折々のうた』第八集に次の歌がとりあげられている。

〈日本らしさ求むる米国の友人に浅草見せて何かそぐわず 高島光「求むる」と文語でいう。「見せて」も文語臭がするし、結句で「そぐわず」と切るのも文語体だ。それでいて新かなを遣うこと、何かそぐわずと思ふのだが。〉

「クリスチャンが三味線を弾いて何のふしきがある」という言葉は興言に過ぎないが、今の場合どちらに寓するだろうか。



須賀敏子

野返湖に郭公鳴いて碧深く

夏深む伊吹嶺よりの竹生島

新東名滴る山河走り抜け

降りそそぐ花火の下の秋思かな

気楽さと寂しさ一人冷し酒

しつとりとカステラ焼けて梅雨深し

子かまきり三日見ぬ間に大人びて

伊吹山（一、三七七M）

八月のはじめ伊吹山へ行つた。前は歩いて登ったが、今回はドライブウェイで九合目（一、二六〇M）の駐車場まで行つた。ここから三本の遊歩道があり、ゆつくり歩いても四十分程で頂上に着く。この季節九合目より一面のお花畑になる。イブキジャコウソウ、シモツケソウのピンク色。メタカラコウの黄色、シシウドの白、ルリトラノオ等々花の種類が多く百花繚乱の山頂である。

この日は六名のボランティアガイドがいて、登山者の質問に丁寧に答えていた。

頂上よりは琵琶湖も望まれ、竹生島もはつきりと見えた。

四季折々、気軽に誰でもが楽しめる「百名山」の一つである。



竹内弘子

墜ちながら天日昏むいかのぼり

朝の蜘蛛ちからを矯めて風に乗る

あぢさみの蔭に身を入れ犬老ゆる

硝子戸にほの白き蛾のとぶ雨夜

木賊より高くは飛ばず梅雨の蝶

月緒くして生酔の墓出づる

きじばとの濁声ことに梅雨深き

いわゆる太平洋戦争の終わったのが小学校の四、五年の頃だったと思う。

東京の親戚から上の学校へ行っていた二人の姉が帰省して「弘子はいいいね」と言いながら田畑の仕事を手伝いに来たのだという、母に言い付かった草取りや台所の洗い物をしていた私は不満であったが、姉達に口答えはできなかった。祖父だけが味方でそれではないと思っていた。

疎開先に着いた晩、中くらいの川添いに蛸が飛んできれいなことといったらなかった。

祖父の縁戚関係の古い農家で、どう使ってもいいということになった。草を取るのが主な仕事で、所在なさそうにしていると「草を取っておいで」といわれた。

家の裏手に田畑が広がって、少しばかりの田圃があった。収穫時には人を頼んで賑やかに取り入れをするのだった。香ばしい稲藁の匂いが庭中に広がった。

祖父が倒れたのは夏の頃、井戸浚えをした後だったと思う。

奥の一間に臥せつてときどき看護婦さんを連れたお医者さんが見えた。

光りつつ

田中藤穂

光りつつ樹液は流れ梅雨の雲

蟬涼し雲分けてゆく奥の院

民宿の屋号油屋花ダチュラ

見覚えの日傘佇ちをり待たれをり

回想の万華鏡めく梅雨ぐもり

十五輻編成電車青嵐

ごろ寝する癖のつきたり長茄子

豊後竹田は静かな小さな美しい町だった。豊後竹田駅のプラットホームでは列車が着く度に“荒城の月”のチャイムが鳴る。この曲の作曲者の滝廉太郎の生れた地だからだ。

竹田城址は今は何も残るものはない。登ってゆくと井戸と滝廉太郎の銅像があるだけだが、城址へ入る石段と壁が美しい曲線をなしていて詩情をそそられた。日本一という高い石垣があり遠くが見渡せた。城址を出た所の小店で月見うどんを食べた。店の人に「いい町ですねえ。」という「何もない町です」と答えた。川が流れていて、私達は汽車のくる時間まで暫く町の中を歩いた。廉太郎の生家も見えた。今その町が豪雨のためひどい状態になっているのがテレビに映った。気の毒に耐えない。

蝸 牛 長崎桂子

葉の雫明けより絶えず蝸牛

降り頻る歩みを止めぬ蝸牛

蝸牛重きを背負ひ励むかな

座像佛お膝に蟻を遊ばせて

蟻の列離れ一匹息を抜く

甚平や今朝もコツコツ下駄の音

今風の今夜の甚平集会所

今年の五月から私の地域では、老
齢の八十名ぐらいの参加者を対象とし
て、介護予防の為に支援で、心と体の
健康づくりは日々の積み重ねが大切だ
からと、四日市市保健所の理学療法士
や作業療法士の方が一ヶ月に一回一年
間、地域の集会所に指導に来て下さる
様になりました。

約一時間の間に「お達者ストレッチ」と『お達者筋力トレーニング』を、
指導の方の「無理をなさらないで」痛い
と感じたらそれ以上はしてはいけません
ん」のお言葉を何回もお聞きして終り
ます。

その後、皆さん汗ばんでほぐれた体
でにこやかに、あれこれと四方山話を
暫く賑やかにして「ありがとござい
ました」と帰ります。

炎 暑 早崎泰江

梅雨晴間通りがかりの写真展

炎昼や木陰の猫の長くなり

無人小屋朝採りトマト並びをり

あれこれと汗の流るることばかり

はやばやと蝉鳴かずして仰向けに

夏の宵満月だよと夫の声

ブルーベリー 鵜が啄む異変かも



ひまはり

森 理 和

梅の雨色の浮き出づ墨絵かな

母弟とんぼばつたと一里半

日盛を瞬時に閉ざす低き雲

暮れきらぬ夏の夜空に雲白し

白玉の井戸水に浮く叔母ひとり

ひまはりや何時か止みをり子の喋り

たつぷりと植木へ水を夏の月

それなら私も参加できる。じつとしていて良いのだろうか。そう思っていた背中を押し出してくれる様に7・16「さようなら原発集会」七月十六日東京代々木公園の炎暑の十七万人の集会の中にいました。第一会場とされたサッカー場に砂埃除けに敷かれたブルーシートがみるみる人に埋めつくされました。何本かは労働組合の大きな赤旗もありましたが、乳母車を押す若い家族連れ、若いカップル、孫の手を引く祖父母。正に思い思いの自発的行動とひしひしと感じました。

中央舞台で挨拶をされた永六輔さんが車椅子のまま舞台を下りる姿を目にしました。蒼白の顔色で、介助の方も付っ切りで病を押してでしょうか。最高齢の寂聴さんは悪い事はやめてと言いつつと。暑さを感じさせない熱い思いの集会でした。舞台に並び大きなスネ顔の少女の絵、作家の奈良ヨシトモさんも壇上に呼ばれ絵の提供を二つ返事に承諾された話を囁く様にされました。



吉成美代子

紫陽花に路上駐車の触れゐたる

ジャスミンの蔓游がせて鉢運ぶ

いちめん十薬無人の家となる

白椿添ふて古搭婆新搭婆

乗り出して亀の子を呼ぶ幼女かな

夏みかんぼんやり灯る西洋館

切株のどっしりとあり梅雨茸





吉弘 恭子

夕やけの虹の彼方へ歩をはやむ

夏空を見上ぐとばずにゐる鴉

蟻の列冗語とびかふ日のなかに

雲の綺羅あぢさゐ色をかさねみし

眼窩へと風もろともに藪蚊かな

牡丹のゆるる揺れゐて影に色

青簾真綿のやうな月ながる

第二次世界大戦の年に生まれ戦火が激しくなった頃東京から福島(母の郷)の三春に移した。その三春から離れて六十六年悲しいことが起きた……………。原発が爆発した時、政府は「直ちに影響はない」といった。しかし三春町では自主的に甲状腺被曝を防ぐ「ヨウ素剤」を配付したそうだった。被曝を防ぐ薬のありかを突き止め、吹き流しを使って放射能がくる時間を予測し必要な行動を素早くとつたとのこと。ヨウ素剤には副作用がある。(インターネットで調べたら七百万人に二・三人との報告)しかし、副町長が責任は俺がとるといわれた。危機の時は、人間の本当の価値がわかる。学歴・地位・富裕には関係がない。又副作用を恐れて服用しないのは本末転倒という記事も見つけた。もつと驚いたのは東電社員、保安院は「ヨウ素剤」をのんでいないのに!!(放射性ヨウ素は甲状腺に集まる、前もって安定ヨウ素剤で甲状腺をいっぱいにしておけば、放射性ヨウ素は甲状腺に取り込まれず排泄されるそうです)自分だけよけりゃという精神はなんだか淋しい気持ち溢れきた。他人(ひと)とは悲しい生きものもいる事を再確認した。

八月作品より

佐藤喜孝

はや立夏^{ひる}寛にたゆたふ雲の生れ

吉弘恭子

日常に追回されていると、時の変化に疎くなる。
作者もその一人だらうか。広い空に雲の姿を見て季節が春から夏へ変わりつつあることを感じた。空は確かに季節で様相が違ふ。「寛に」といふむずかしい云ひ方でなく表現できるとよりよくなる。

はや立夏光と水の大水車

沼口蓬風（河鹿）

蟬よなけはや立秋ぞ樹木しだる

深尾修（獐）

南天の花あふれをりこぼれをり

赤座典子

大きな花は一花でめぐる。小さい花はまとまって目を惹きつけやうとする。南天は後者、盛りのころは「あふれる」やうに重たげに咲く。木の下には散った花を目にする。その辺を「あふれをり」「こぼれをり」と畳みか写生句の佳品に仕上げてゐる。次に

南天の花にであつた時、この句を思ひ出すことだらう。

紅の色変へてみやうか虎が雨

赤座典子

珍しい季語である。「あを」ではへ戦略と云ふ言葉のはやる虎が雨 芝尚子へ一句がある。難しい季語だ。

陰暦五月二十八日に降る雨、虎御前が流した涙だといふ。虎御前は大磯の遊女で仇討で有名な曾我祐成の妾とある。遊女と妾が両立するのか、かういふ世界に疎ひ私には分らない。掲句は連日の雨に紅の色でも変へて気分も変えやうかといふ意だ。だれでも思ふことがらだが、「虎が雨」でウィットの利いた面白い一句になった。

傘持たず来たるは不覚虎が雨

小川匠太郎（狩）

あいの風飛行を試す鵠の雛

大日向幸江

放鳥された鵠が卵を産み雛を育てるニュースを興深く見た。作者も同じやうにテレビの画面に一喜一憂したのであらう。「あいの風」は「夏の穏やかな北風をいい、日本海沿岸でひろくもちいられる」とある。巢の上などで羽ばたく練習をしてゐる。「あいの風」といふだけで景に潤ひと広がりを得た。

遠くほど光る漣夏の川

木村茂登子

川の漣とあるから急流ではないやうだ。川面全体が光つてゐるのだが遠いほど太陽に煌めいてゐる。夏の川面を良く表してゐる。静かな景である。この句を読んでなぜか芝不器男の「白波を一度かゝげぬ海霞」を思ひ出した。

家系図に川漣の浮藻咲く

亀田虎童子(題詠川)

さざなみの濃くうすくなる冬の川

吉弘恭子

夏木立東京タワーの足見いっけ

篠田純子

今衆人の目はスカイツリーに向つてゐるやうだが東京タワーも元気がいい。タワーの間に立つた人には全容が見えない。夏木立の中に色鮮やかな鉄の構造物がある。あつさうだ、と気がついた。「東京タワーの足見いっけ」である。童心に返つた驚き。俳句にはいろいろな表現法があるものだ。

濃く点す苗代寒の終バスは

定梶じょう

作者には終バスの句が幾つかある。私の住む青梅街道でも行先表示に赤灯を点したバスに遇ふことがある。癖のやうに暫く見送つてゐる私がある。何故なのだらう。田の中を進む路線バスならなほさらであらう。「濃く点す」に作者の情感が籠つてゐる。

終バスは降りて見送るみぞれけり

定梶じょう

にあるやうに終バスに乗つてゐる者とそれを見送る

者とは全く感覚が違ふとおもふ。作者は何時も見送る側である。

遠ざかる終バスの灯や夜の秋
終バスの尾燈遠のき虫しぐれ
上田繁（遠嶺）
竹腰千恵子（濱）

何処にでも防犯カメラ夏兆す
須賀敏子

事件があると防犯カメラの映像が出て来る。まさに「何処にでも」あるやうだ。鬱陶しいとおもふのか安全だとおもふのかこの句ではわからない。わずかに「夏兆す」に意思表示がうかがへる。がもう少しはつきりしても良いかもしれぬ。

窓の外下駄の音する桜桃忌
田中藤穂

桜桃忌は今年で六十四回ほどになるらしい。もうむかしむかしのことになってしまった。作者には青春時の印象に残る事件なのだらう。窓外から今はあまり聞かれないなつかしい下駄の音がする。桜桃忌

を意識してゐる作者に下駄の音はタイムスリップをする切っ掛け。

心中、情死といふ言葉には甘美なささやきがきこえるが、現実はずう甘くはないかもしれない。六日後発見された太宰治・山崎富栄の土手に横たえられ、それを傘を差した人が遠巻きに見てゐる写真を見た。そんな写真が残つてゐるのに驚いた。

掲句の桜桃忌はそんなに深刻なものではない。

心太胸の痞へを下しけり
長崎桂子

「痞」の否は「ふさがる」といふ意があるさうだ。胸の痞へは何かの切っ掛けに下りるもののやうだ。心太は痞へを下ろすのに何故か相應しいように思へた。「あを」の方は季語のあつかいがうまい。

よく「心天」といふ表記を目にすることがある。間違へてゐるのかと思つたが一概にさうともいへないやうだ。「心太」と書いてところとんと読むのも不思議だし、ココロブトが変化したものだと思ふ辞書にあるが、ココロブトは「日本国語大辞典」にない。

前月抄

梅雨の蝶雨より低くとびつづけ

佐藤喜孝

はや立夏寛にたゆたふ雲の生れ

吉弘恭子

南天の花あふれをりこぼれをり

赤座典子

あいの風飛行を試す鵲の雛

大日向幸江

遠くほど光る漣夏の川

木村茂登子

夏木立東京タワーの足見いつけ

篠田純子

濃く点す苗代寒の終バスは

定梶じょう

何処にでも防犯カメラ夏兆す

須賀敏子



窓の外下駄の音する桜桃忌

田中藤穂

心太胸の痞へを下しけり

長崎桂子

いつせいに田より跳び出す青蛙

早崎泰江

明月院姫あぢさゐに蔽はるる

森理和

籐椅子や祖父の思ひ出遥かなる

山莊慶子

卯の花腐し金臭きたなごころ

篠田純子

梅雨晴や畳表の香に噎せる

吉弘恭子

喜孝抄



八田木枯回想

その二

―夕焼けて西の十萬億土透く 誓子

阿部寒林

木枯・鷹見のことなど

木枯が『天狼』四月号で巻頭を獲得した時、地元の伊勢新聞の文化欄に大きく発表されたことは異例のことであった。これは同社の論説委員で且「伊勢俳壇」という欄の選者でもあった内藤まさをの影響が大きかったと思う。後に主筆となり「三重俳句」を今日まで遺し平成八年三月数々の賞を授与されて九十五歳近くで長逝された。前述の頃はぼくも何回かお会いしている。新聞掲載の反響は深山幽谷、洋燈生活くらしのぼくには不明であったが最大のローカル紙であったから少なかつたと思う。まして誓子も木枯も又鷹見も伊勢在住である。まだ見ぬ若い二人にはどうしても伊勢に在る間に

会って見たかった。結局木枯との初対面は、ぼくが深山開発の事業が終了し東京へ還ってからであった。（大杉谷は現在の宮川ダム）正確には記せないが昭和二十三年の冬のある日であった。津の常盤町という住所、材木屋という職業などい思うと木枯からの手紙以外に知ることは考えられない。又その住所は伊勢新聞社の好意で知らせて呉れたのかも知れない。

三重県津市は県庁の所在地で藤堂氏三十二万石の城下町であるが、ここも戦災に遭い淋しい町となっていた。誰かに尋ねたに違いないと思うが、常盤町の八田木枯の所在は直ぐ分かった。店構えは深川木場に見る典型的な羽柄材問屋の構えであった。羽柄材というのは木材界の用語かも知れぬが一般に針葉樹の製品を指している。特に杉・桧などが中心となり他に松・樅・榎などもそうであるが八田木材の林場には杉・桧の二間材の板が立て掛けてあった。短い屋根。倒れないように太いロープで支えられていたが。テレビなどで見る時代劇で材木屋の軒先に板が何枚も立て掛けある場面が多い。こんな出鱈目なことはない。製材機もない時代に一枚一枚鋸で引き出す板の一枚がどれ程大切であったか、その時代考証を考えるべきであろう。ひどい時は外材の丸太置き場などもロケ地にそ利用されている。

初対面の木枯は十年の知己の如く迎えてくれて、同業であっても材木の話は一切出なかった。帰りに広い通りにある古材の床板の喫茶店に入り達磨ストープの傍で珈琲

を口にしながら木枯が「こんど鷹見のところへ案内しますヨ」と言った。この日、長兄の進氏には会えなかったがお母さんには会った記憶がある。

約束の鷹見訪問は翌年の晩冬であったと記憶する。鷹見は伊賀上野の菓子屋の一人息子で母一人との生活くちしのようであった。

ぼくと木枯は奥の彼の部屋に招じられ、炬燵に入りすぐ俳句の話題となったが、この時鷹見の弟子の立場にあるらしい一人の青年が訪ねてきて炬燵に加わった。中恒三郎と紹介されたが、鷹見も木枯も中恒と称んでいた。この伊賀上野の一夜の時の年令は、やや不正確かも知れぬが木枯が二十四、五才、鷹見は二十一才か。いづれにせよ木枯の一つ上がぼくである。従って二人が大正生まれというわけである。

木枯が、鴨居の上に掲げてある小さな額に眼を止めて鷹見に訊いてみた。その額の中には四百字詰の原稿に何か書いてあった。鷹見はすぐ外して見せて呉れた。それには

「私に直結していればいいです」

と師の誓子からの手紙の一部であった。木枯はすぐ「遠星集の成績の悪かった時の愚痴に先生が返事を呉れたのだらう」と彼の顔を見ながら言った。これは彼も否定しなかったが、どちらかといえば饒舌であった彼のことであったから「巻頭を採ったと喜んで次は落選か一句欄だから油断出来ない。」と本音を炬燵の上で喋り出した。事実、

鷹見も木枯も「遠星集」の創刊年（四月より合併号を含み八ヶ月分）だけで見れば二人共二回づつ一句欄に落とされている。

中恒三郎つねに関してはよく木枯は知っていて後年木枯は彼の

子らがまた雪のお庭を汚すでしょう

恒三郎

この口語体を高く評価していた。

夜も更けてきたが、鷹見が中垣に二、三人の仲間を呼んでくるように頼んでいたが木枯もぼくもこの寒さの夜更けに起きてくる筈がないと思っていたが程なく色褪せた襦袢を被って三人が集ってきたのには驚いた。すぐ句会となり、結局昼すぎまで寝込んでしまった。

いま思うとあの青年たちは美しい想い出を作ってくれたものだと思っている。後にいづれも鷹見と木枯中心に発足した『星恋』の同人となった。

伊賀上野の一夜はその後訪れることのない土地となった。

木枯が表鷹見という青年と出会い生涯の友となったことは二人が傾倒する山口誓子の存在に拠るところ大である。然し鷹見は京都に移りいちどは木枯とぼくと東京で会ったがその後一、二度の年賀状のみでぱったり消息が絶えてしまった。後年木枯は（平成十二年～十三年）富士経済（市場調査）の社内俳誌『点線』誌上に「紅絲・橋

本多佳子と行方不明の表鷹見へ」と題して連載している。

卒業歌窓を出てゆきかへらざる

鷹 見

木枯は単なる卒業の歌とは思わずあの俊英、表鷹見の人生観をこの句からしみじみ味わっていたのだ。この句は雷魚同人の松崎豊が神戸方面の何かの雑誌にされたと木枯に報じて来たとのことであった。後年木枯は（鷹見は死去していると思いつつ）「この句はぼくたちと永遠の別離を示している句です」と言っていた。ぼくも同感であった。

俳句に関しては天才的な木枯、鷹見の二人が念願の俳誌『星恋』を創刊したのは『天狼』『七曜』などの創刊より二、三年後であるが当時二人は『星恋』は誓子命名であり且直結である。断じて傍系誌ではない。」といていた。この時期に二人は恋い焦がれる多佳子を訪れるわけである。

いなびかり北よりすれば北を見る

多佳子

この有名句は（奈良西大寺に句碑建立）表現は平明であるが詠まれている内容の充実に共鳴したくなる。この多佳子句以来木枯たちも“稲妻お多佳”の愛称を付けて敬愛していたことを知る人は少ない。しかし前述の木枯や鷹見は誓子に対しては崇拜

に近い気持をいつも持つていたわけである。然し木枯の言うには鷹見はあの伊賀上野の炬燵談義の時に彼の示した句に感心を持ったが、類想類句は短詩型の宿命であるから余り非難は出来ないと説いていたのを思い出す。

ここは地の涯か跣の人ばかり

鷹 見

ここは地の涯か野を焼きつくす

誓 子

彼、鷹見が僕たちに盗作だと愚痴るのも無理もないが誓子の一筆を額に掲げたことによりさらに誓子選に挑んだということになる。

ぼくたちは当時あらゆる点から誓子に傾倒していたのでいかなる生活の場に於いても軽視するようなことは絶対なかったのである。

いみじくも暖流主宰瀧春一がこのような心境を一句にまとめている。

かなかなや師弟の道は恋に似る

春 一

当時馬酔木同人でもあった春一が師の水原秋桜子を有馬登良夫と共に訪問（面談は二回目）自己主張の「無季容認」の理解を得ようと懇願したが師の秋桜子は断固と拒絶したわけであるがその帰途、蝟の声が耳に届いた時に「師弟の道」の句が生まれた

のである。木枯もこの句には共鳴していた。

然し木枯たちの「星恋」は周囲の悪条件などにより三〇四号位で廃刊となった。

町へとぶ醜聞梨は砂噛むごと

鷹見

このような句を二十代の若者たちが創れたということは当時四十代であった誓子の影響大であった。折角、木枯、晩蟬、或は寺山修司などの逸材が集まってきたが当時の若者たちには有力なオーナーを得られなかったのが最大の原因であった。同じように石田波郷編集の『現代俳句』も短期で廃刊となったが、これは波郷の健康上の原因もある。この『現代俳句』に木枯は波郷の依頼により「誓子の下に」と題して数句を掲載されているが今は手元がないので如何なる句かは不明である。木枯が句作活動で鷹見と異なる点は、『天狼』の創刊までは（ぼくも同様）ホトトギスは卒業したとして『萬緑』『馬酔木』『寒雷』『若葉』『笛』その他、諸俳誌の雑誌欄へ投句しそれなりに厳しい選者の姿勢の時代であるのにも関わらず上位入選をいつもしていたのには驚いていた。然し木枯に劣らぬ力量のある鷹見はいずれの結社にも所属せず誓子の下に学んでいたのである。恐らく京都へ移ってからの生活が大きく変化したように句作活動に専念出来なくなってきたのかも知れない。

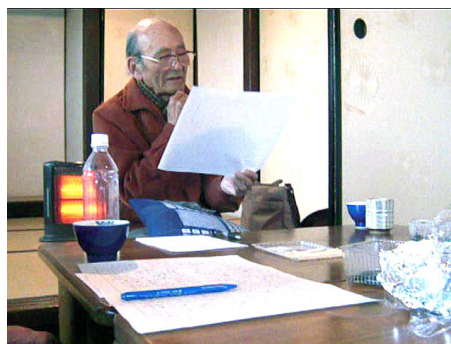
（この項つづく）

二〇〇五年四月
杉並区真盛寺



阿部寒林
堀内一郎
田中藤穂
八田木枯
芝 尚子
東亜末
大山夏子
齊藤裕子
早崎泰江
篠田純子
赤座典子
波邊京子
竹内弘子
須賀敏子
吉弘恭子
森 理和

東京大学医科学研究所
二〇一〇年四月



中野区哲学堂
2009年3月
写真 佐藤喜孝

近世俳諧と漢詩文

五十八

王 岩

粒々りふりふ皆身にしる露のかゞしかな

蕪 村

『夜半叟句集』に出典したこの句は、中唐の詩人李紳（七八〇～八四六）の五言絶句「憫農（農を憫む）」を下敷きにして詠まれた。講談社版の『蕪村全集』第一巻の²⁵⁴⁴頭注には、次のように解釈してある。

かゞし（秋）○粒々皆 李紳「誰知盤中餐、粒粒皆辛苦」 朝露にぬれて立つ案山子 は、百姓たちの粒々

辛苦を直接に知っている。露のようなはかない身ではあるけれども。

李紳の「憫農」詩は中国では幼稚園の年長組までも諳んじ得たほど広く知られている唐詩である。全詩は次の如く、

鋤禾日當午、 禾を鋤きて 日は午に当たる

汗滴禾下土。 汗は禾下の土に滴る

誰知盤中餐、 誰れか知らん 盤中の餐

粒粒皆辛苦。 粒粒 皆 辛苦

詩題の「憫農」からも覗い知れるように、農民を憐れむ詩作である。江戸時代の俳人たちにもよく読まれ

た唐詩の一つに数えられよう。蕪村に止まらずに、李紳の「憫農」を踏まえた俳句は他の俳人にもある。例えば

日当午

風なくてかげろひ落る桜哉

蚊 足（『続虚栗』）

粒々皆辛苦

夫ほどにいたゞかぬものことし米

大江丸

誰知盤中餐、粒粒皆辛苦

田中取うた泣にはまさる夕景色

栗木青羅

粒々辛苦の種まく日よりも、風雨をいとひしころ晝しを

かけ稲やあらひあげたる鋤の数

白 雄

粒々皆辛苦

うつかりと田植見てゐる筈はなし

青 魚『新選』

粒々皆辛苦

もたいなやひるねして聞田植歌

一 茶

粒々皆辛苦

あらましは汗の玉かよ稲の露

一 茶『だん袋』

あを創刊十周年記念句集を読む

『母瑠河』

佐藤喜孝

定樞じよう

3

走り根のまた土に入る白露の日

この句の要点は、中七「また土に入る」でしようか。走り根はなるほど、一旦地上に現れて走ったあと再び地中に入る。それ以上でも以下でもない。その、以上でも以下でもない処を、人はなかなか言いとめ見止とめることができない。そして、取り合わせた「白露の日」がまたうまい。

立秋は八月上旬にあるわけですが、八月中は暑さ

の衰えること少ない。露そのものは春夏を問わない筈ですけど、やっぱり九月に入つての露は土までも潤す。夏から秋への交替は白露しろつゆを目印とする、それが「白露はくろの日」である、と気象学者は書いています。 そんな土中を、根は出て再び入る。

その「走り根」。ごく普通の、日本全国で遣われる言葉ですけど、奇妙なことに、辞書に採録されていません。辞林・辞苑・辞泉の三大国語辞書はむしろのこと、五十万語収録の日本国語大辞典、平凡社大辞典（たぶん七十万語以上を掲載）さえのせていない。ある語が辞書に掲載されていないのは、その言葉が存在しないことを意味しない、とも言いますのでそういうこともあるわけですけど、それにしても奇妙なこと。

吾亦紅の角を曲つてきてください

おもしろい。端的にいえば、俳句は面白くなくつ

ちや何のための俳句か、と。

吾亦紅が案内の標識代りになることに驚嘆。この花は、人が植えることもしますが、掲句の場合野の花でしょうか。その咲いている所を曲つて、と。

桔梗の苔はポンといふかたち

たしかに花ひらく前の桔梗は、紫紺が充分にふくらむと、今にも破裂しそうな。そしてその予想する音を喜孝さんは「かたち」に転化した。熟練の句。加賀千代に

桔梗の花咲時ポンと言さうな

があります。もちろん、類句だ真似だという意味で千代女の句をとりあげたわけではない。先行句があることに喜孝さん、驚いていらつしやるに違いありません。

昔は漢字に仮名を送ること余りしませんでしたから、のちの世人が読んで煩雑になる句が多々ありま

した。千代女の句も、「咲時」は「咲くとき」でしょうが「言さうな」は「いひさうな」「いふさうな」の両様に読めます。ポンと音がしそうだ、という意味の「言ひさうな」の方は私はとりたい。そして現代の喜孝さんと、二百数十年前の女流俳人が、感じて同じ発想を得る。愉快ではありませんか。

入口に電柱のある冬の通夜

数十年後には無くなる景。そうでなくても玄関すぐわきに電柱のある景はなんとなく懐しい。

ここ迄ならあるいは他の人でも詠めたかもしれない。喜孝さん独自ののは「冬の通夜」。イメージしてみて下さい。暮れ早い時期のゆうぐれ。自宅葬のいささか雑踏する玄関。奥に皓々点る灯。その入口に立つ電柱を作者は見逃さなかった。

意味を求めない俳句ですから、その電柱が何うしたんだ、と尋いてはいけない。句の余情を味わうべ

き。

何の日か道に迫りだす国旗の棒

わが家で国旗を最後にかかげたのは十数年も前。家内亡き今、旗そのものが不明。だから、「道に迫りだ」している国旗にであうと、はて今日は「何の日か」と。ともかく喜孝さんの句には、人とは違って表現される処がある。道へ掲げる国旗、と平凡に言ってしまうところを、「道に迫りだす」と。先に上げた

炎天を挿す傘の柄にすがりゆく

の「すがりゆく」もそうでしょうし、

會ふときはいつも途中よ金魚売

の「途中」も然り。類型ではない、凡ではない、ということだ。

うまい子のいま生れしごと汗の髪

熟寝子は美しく（うま）（ぐっすり）寝たり、という用例もありますが、うまいする幼児はうつくしい。汗は、幼児の体表面積が体重に比べて大きく、多量に発汗して、夏なんか体熱を奪ってくれるのだそうですが、ともかく睡眠中の小児の汗は日常的に見られること。その折の濡れた髪を見逃さず、生まれてきたばかりのようだ、と言いつめた。赤子の眠りこそ真実。



あを創刊十周年記念句集を読む

『けゝゝ』 竹内弘子

斧田綾子

1

弘子さんに初めてお会いしたのは、今から三十五年前の大宮の句会でした。

当時の弘子さんはすでに『暖流』の新人として活躍されていて、句会のメンバーの憧れの存在でした。俳句の前は短歌をされていたように伺っています。なぜ俳句に移られたのかと聞いたら単純明快に、俳句の方が好きだからと、言われたような記憶があります。

その頃大宮図書館の書架で、塚本邦雄の『秀句燦

燦』？だったかに偶然弘子さんの句を発見して、後日申し上げると、ご当人はその本のことをご存知なかった、ということもありました。

以来、句会や誌上で弘子さんの多くの句に接してきたつもりです。ところがこのように二四五句纏まると新たに见えて来るものがありました。

先ずこの集に限って言うならば、断然多いのは作者の最も愛する人達の句でした。殊にお母様の句が多いのです。

干し梅を母恩のやうに大事がる
鮎の酔にむせて母似の咳こぼす

私などは「母恩のやうに」という中七も導き出せませんが、肝心なのは「大事がる」のフレーズです。軽く言っていますが微妙な心理です。大事にす、と素直にのべることの出来ない微かな屈託が感じられ

ます。

後句も「鮭の酢にむせて」と何気ないけれど、よまれているのは結局「母」との一体感ではないでしょうか。

亡き人をとときき忘る椿餅

忘れていない証拠ですよ。

風入れて母は箆笥のにほひかな

寒禽や二階にのこる子の句ひ

子を生みし七月七日水の句ひ

おいが愛する人達への想いを誘うきつかけになっていますが、なぜかにおいては母性というものに深く関るような気がいたします。

夏雲や声を囁らして子を呼べる

流燈やその幼子の手を放すな

夏雲の句は普遍的です。いろいろな場面が想像できます。人間に限らず小鳥でさえ、子を探す時は必死で鳴き立てます。しかし一人称としての掲句をどうよんだらよいのでしょうか。親元を離れて去ってしまった我が子。しかし眼前にあるのは元氣そのものの如き夏雲があるのみ。声を囁らしているのは親の情愛そのものかもしれません。深入りするときりが無くなりますので止めておきます。

後句も又普遍的です。幼子が水辺に近寄ると危なくてはらはらします。昔の子は川でよく溺れました。だから燈籠流しは子供心にもある種の実感がありました。美しく又恐ろしい雰囲気のある行事でした。今、全く違う世に生きていることに気付かされます。

花束のやうに初子を手渡さる

四温かな玻璃越しに子のまるはだか

春の星ちひさきものに降りそそぐ

初めてのお孫さんでしょうか。うれしそうな句が並びます。一句めなどは堂々の無季です。

祖父はかの岩穴に棲む山椒魚

山椒魚は弘子さんのお好きなモチーフです。山椒魚そのものの句も、この集だけで五句見付かりました。追憶のかなたにある祖父という存在は、確かに山椒魚のイメージに近いかもしれません。この句を媒体にして、私も記憶の底に沈む祖父を思い出そうとしましたが、なかなか穴から出て来ません。やはり穴の口は小さく暗いのです。

霜月や餌をやるとき犬の息

犬埋めし辺り木賊の濃きみどり

身近かな存在だった犬の句は、この集になると四句だけになりました。身辺の歳月は否応なくめぐり変化します。季語としては木賊刈る、ですが、作者は木賊の更なるみどりをみつめています。なお広辞苑によると、お能の作品に木賊というのがあり、木賊を刈る老人が別れた愛児を慕い、その舞の手ぶりを思い出して舞う。とありました。この木賊の斡旋には興味をひかれました。

いちぢくの熟しすぎたるとき鬱

春愁やまつくろに書く舊漢字

春愁のようなはつきりしないものを詠むのは難しいと思うのですが、かくもリアルにイメージ化出来るのは絵画もなさる弘子さんならではの句かと思えます。

赤ペンと天眼鏡と春の鬱

『暖流』『雷魚』の編集をさせていただきました。

下五が妙に鮮やかなのが不思議です。天眼鏡の効果かもしれません。

断崖に白靴を脱いではならぬ

自殺の名所として思い浮かぶのは熱海の錦ヶ浦と福井の東尋坊です。古い話で今の人には通じないかもしれませんが。携句は不思議な句です。「脱いではならぬ」に関係なく、断崖の上の白靴がありありと見えてしまいます。物が語ってしまうのです。残念ながら白靴は流行らなくなりました。自殺の方法も変わりました。

恍惚と首しごかるる鶴もあらむ

対象にこんなに接近できる力に圧倒されます。何

となくなまめかしくもあります。

黒白のあはひに鶴の凍つるらし

こちらは遠景ですが、雪の中に立ち尽くす鶴がいます。黒白のあはひ、とはさすが手練ですね。

おおやしま水没もせず梅雨明くる

出水は元より梅雨出水も季語として扱われる日本国。毎年毎年梅雨末期の出水には悩まされ続けます。特に最近の集中豪雨の凄まじい被害には言葉を失います。携句は最近の句ではありませんが、まことに日本列島危うしの感があります。（つづく）

季語刻々

坪内稔典



朝夕の水を^み攪みて母の夏

堀内 一郎

「水を攪みて」がいいなあ。水仕事をしている母の手が生き生きと見える。句集「^な疊」から引いたが、「母^な逝きて^な茄子のしぎ^な焼一度だに」もこの句集にある。母は茄子のしぎ焼きが得意だったのか。

そういえば、水仕事とか^み水仕という言葉をあまり耳にしなくなった。水に触らないで料理や洗濯ができるようになったからか。

2012・8・19

堀内 一郎氏はお元気である。ところが 一郎氏と会っても話が出来ない。指先が震へて字が書けない。意思の疎通がうまくいかずイライラしてゐるやうだ。今年の五月号に

さくら餅皮ごと食うべ失語症

を発表して以来句が投稿がない。たずねると句が出来ないと云ふ。

上掲は毎日新聞の切抜き。坪内稔典先生が『^な疊』を採り上げて下さった。一郎氏の奥様からのお電話で 一郎氏が喜んでゐたとお電話を頂いた。快復の力になつて欲しい。

句も出来ないなどといはず一句でも二句でも作って欲しい。出来たら奥様に電話して貰つて下さい。書きとめに行きますから。私なら出来ますから。ね、一郎さん。

あとがき

定規じょうさんには本当に力づけられてゐる。又桔梗の句の寛容な文、汗顔のいたりです。しかし今月号で奥様がお亡くなりになられたことを知り驚きました。奥様は私の近くの中野区弥生町出身だと聞いてゐたので、勝手に親近感を抱いていたのです。まことに残念、ただただご冥福を祈るのみです。

「八田木枯回想」のうしろにアルバムを付した。今月は皆お花見の写真。その折の木枯作品を記しておきます。哲学堂の写真は動画からです。藤穂さんの句の感想を述べてゐるところです。

真盛寺

〈喜孝〉

哲学堂

春ふかし紙のごとくに猫吹かれ
ふるさとや土のうへより春のくれ
投げしもの必ず落ちて水温む
罫線よりはみだして鳥帰りけり
弥生尽和菓子いろいろ色いろいろ

花こぶし鳥語はルビのごとこばれ
哲学はわからずじまひ花こぶし

白昼のかけらなりけり落椿
空かけてあまねくゆるる桜かな
ことだまは戯れやすきもの花は満ち

東大医科学研究所

鳥はかずふやさずにとび花は満ち
好晴のしだれぎくらの重さます
打ち晴れていづこもさくらさくらかな
落花翩翩 東大医科学研究所
花づかれ俳句づかれもなしとせず

二〇一二年九月号

発行日 九月十三日
発行所 東京都中野区中央2-50-3
電話 090-9828-4244
ファックス 03-6908-6038

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子
竹僊房

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替 00130-655526（あを発行所）

表紙・佐藤喜孝
乱丁・落丁お取替えます。

